
未定一。

国土無双

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
未定！。

【Nコード】
N7761M

【作者名】
国士無双

【あらすじ】
間抜けな主人公が酷い目に遭うお話。

キャラ詳細

きりゆう・かえで
桐生鶏冠井

- ・英語、数学A、社会A、国語Aが赤点。
- ・チヨココロネ患者。
- ・阿呆。
- ・妹と2人暮らし。
- ・手先が不器用。
- ・男。
- ・割と良い雰囲気を出している。その為、友達ができやすい。しかし3日以上友達でいると本性がばれ、友達を失う。
- ・目立ちたがり屋 鶏冠井 普通
- ・B型
- ・高2。
- ・グッピーを5匹飼っている。
- ・もやしっ子。
- ・お宝は金庫の中。

きりゆう・みく
桐生未来

- ・鶏冠井の妹。
- ・テストは9割打者。
- ・不都合があると黒くなる。
- ・1日1通はラブレターが。
- ・女
- ・高1。

- ・裏で何か仕事をしている…らしい。
- ・ピンクの髪の毛。
- ・部屋も真っピンク。
- ・母親と父親を恨んでいる。
- ・O型。
- ・結衣を「お姉ちゃん」と読んでいる。

もりなが・ゆい
森永結衣

- ・鶏冠井の幼馴染み。
- ・男口調。
- ・ぺったんこ。
- ・飽きっぽい性格。
- ・バイト経験120回。
- ・結構万能（料理以外は）。
- ・楽器全般OK。
- ・父親単身赴任。
- ・たまに旅に出る。
- ・ショートカットの茶髪。

むた・あきひさ
牟田聡久

- ・鶏冠井の幼馴染み。
- ・伊達眼鏡。
- ・ツツコミ苦手。
- ・ボケ苦手。
- ・それなりに真面目。
- ・ムツツリ。
- ・家にはデスクトップパソコン3台装備。
- ・小企業の経営者。

あさと・かな
朝里佳奈

・パン売ってる。

・好きなパンはメロンパン。

さく・じい・はるか
桜井遥

・鶏冠井等の担任。

・まだ20代前半。

・未婚。

・機械音痴。

・ポルシェに乗ってる。

ブローグ

.....

「...ちゃん、お兄ちゃん！遅刻しちゃうよ！」

「んあ...」

寝ぼけ眼で時計を見る。

短針が8、長針が3を指している。

つまり、8時15分。

「まずい！何でこんな時間に！」

ふと部屋を見渡すと、点けっぱなしのテレビとPS3。

俺が居るのは、ベッドではなく、座布団の上。

...大方理解できた。

昨夜、徹ゲーをしていたところ、急に眠くなり、そのままパタリ。

.....

「遅刻だあああああ！ちょ、未来！着替えるから出る！」

慌てる未来を押し出し、力強くドアをしめる。

急いで干してあるカッターシャツを奪り、ネクタイを通す。

こういう時に限って、なかなか輪っかが作れない。

普段なら絶対10秒以内にやってるのに！

...いや、15秒？

ええい！そんなことはどうでもいいのだよワトソン君！

無駄な思考が一番時間を食うんだよ！

え？急がば回れ？

うつせえ！どこを回れって言っただよ！

部屋？

回れねえよ！

くっそ！こんなネクタイ、どうにでもなれええ！

- 3分後 -

「お兄ちゃん…キュートなアクセサリーだね…」

「気休めは止せ妹よ。これの何処がキュートだったんだ」

「ほら…団子つてところが現代っ子っぽくていいじゃん…あ、チャイナか」

「それは団子ヘアだろおお！俺のは首からぶらさがってんの！見てみ！？これ！」

「…激しく鬱陶しいよお兄ちゃん…」

「す、すまん。熱くなりすぎた…」

「ただ不器用なの…貸して」

「おう！？」

グイッとタイを思い切り引っ張られて首が締まる。

このネクタイ。団子結びになってるくせに、何で滑るんだよ！腹立つ！

「……これで良しと」

「すまん…。でもお前、もう遅刻確定だぜ？」

「あ…」

「いやあ、とんだ災難だったな。でも俺はこんな良い妹を持てて幸せだな…あ？」

「うっさいバカ兄貴！お前エのせいで遅刻だろうが！単位落ちたらどうすんだよ！あ？言ってみ？コラ」

「……不甲斐ない兄で申し訳ござらん。この件については切腹するしか…」

「だあああ！うっせえ！死ね！死ね！消え失せろ！二度と現れんな！」

ドガッ！ドガッ！

腹、顔面、肩、尻。

色んな所に蹴りが入る。

はあ、ヒールじゃなくてよかったあ…。

どうやらウチの妹、不都合があると黒くなるみたいです。

いや、オーラが。

目元じゃなくて。

目元が黒くなるのは、俺。

殴られたアザだったり、恐怖に伴う寝不足だったり。

いかんせんダメ男です。

「うおう、凄えな、お前の顔」

「いろいろあつてな…。恐妻ならぬ恐妹だよ」

こちらは親友Aこと森永結衣。もりながゆい

女のくせに、男言葉で話す、色気とはかけ離れた人間である。

「今もの凄く失礼なこと考えなかったか？」

「お、察しいいいねえ。何？今調子いいの？」

「何がだよ！つか何？殴られたの？」

「そんな甘つちよろいもんじゃねえ。首締められて恐喝、蹴り入れられて今に至るって所かな…」

「壮絶な…戦い？」

「一方的な。背水の陣でも敵わねえよ」

「大変だな…」

「お前はバイト続いてんの？」

こいつ確か…ローンでバイトしてたような気がするんだが…

その前がPI Z A H Tの配達員で、S T R B A K S C

O F E Eの従業員……

「からつきしだよ。この前、客がエッチ本買ってて、防衛本能で殴つちやって…」

「お前、コンビニで働くな。今後一切。路上ライブでもやって駄賃集めてろ」

「いや…それがさ、全然集まらねえんだよ」

「何！もうやつちやつたカンジ！？」

「ギターケース前に置いてんだけど、コレ投げ込んでくれる奴少ねえんだよ」

「コレだよコレとか言いながら人差し指と親指で丸をつくっている。

へえ、何それ、仏様の真似？

「それも100円とか500円でさあ。千円くらいくれって話なんだよ。ギターの整備費の方が高くついちまって、大赤字だ」

「で、辞めたのか」

「察しの通り」

「長続きしねえな。ギターにハマったり…そうだ、お前、一回だけ会社立ち上げようとしたよな？」

「懐かしいな。あの頃ははっちゃけたもんだ」

「いや、半年前な…」

「外資系の会社を立ち上げようとして、家の口座から全額下ろしたときにや、酷く怒られたからな。懲りたよ」

「金を下ろしたお前が悪い」

「一時のテンションに身を任せると大変なことになるぜ！」

「わー、すごいせつとくりよくー」

「……日本銀行に勤めてみたい。あと、ヨーグルト食べたい。BI
Oチャレンジしたい」

「脈絡無いにも程があるよー。日銀はわかるけどヨーグルトはわからーん」

「もうすぐ進路希望提出かあ。鶏冠井かえでは何って書くんだ？」

「一応、進学。高卒で就職はキツいかなって」

「利口だねえ。あたしは一生バイト&パート&ニート生活でいいよ泥沼生活キタ！いいのそれで！？人生棒に振るよ！？」

「だってあたしが大学進学なんて考えられるか？この高校入れたのだって奇跡の中の奇跡なんだから」

……確かにそうだ。

結衣の中学校の頃の成績はオール3。

んでもってテストの平均点は250点。

また奇跡が起きない限り、大学校進学は到底無理だろう。
神様もそこまで暇じゃないだろうし。

「そうだな。諦める。お前の人生はそれでいいんだ。お前らしく生きれば、それで」

「あたしがニートだと言いたいのか？」

「そういう意味じゃないんだが……」

「ならいいけど……。鶏冠井かえではどこの大学に？」

「決めてない。地元でもいいし」

「ふうん。じゃ、飯食ってくるから。じゃな」

「俺も飯食うかな……」

一章、昼食

「……バカな… チョココロネが無い…だと？」

昼休み、購買近くのパン売り場にて。

250円を握り締めてパンを買いに向かった。

希望はチョココロネとコーヒー牛乳。

しかし、チョココロネが売り切れだった。

「あのチョココレートとパンの絡みが最高で、さらにコーヒー牛乳と混ぜり合うことでサッパリとした味わいに！俺はこれ以上何を求めればいいんだ！」

「いや、意味分らないから。代わりにこれでも買って行きなさい。明日はもつと早く来ることね」

はい、と言って渡された、

メロンパン。

チョコチップメロンパン。

「チョココレートの体積は少ないけどメロンの風味が追加されたよ。

じゃ、毎度あり〜」

半ば強引にチョコチップメロンパンとコーヒー牛乳を渡され、手に握った250円を全て持ってかれる。

あれ？お釣り出ないの？

「俺…メロン嫌いなんだよ…」

西瓜も嫌いだ。

カブトムシみたいな味がする。

「おー、今日はメロンパンか。珍しいな」

「よ、聡久。あきひさこのパンはな…パン売ってた超自己中女に押し売られたんだ…。クーリングオフって有効かな？」

「無理があるだろ…」

「じゃ、お前のそのきび団子と俺のこのメロンパンを交換しようぜ。

してくれたらお供になってやってもいいぜ？」

「別に良いけど……」

「……やっぱお前、ツツコミのセンスないな。普通今のは『どこの昔話だよ！しかもきび団子なんて何処に……何で、こんなところにきび団子が……これが活字の力か……』とツツコミ+ボケも形成できる最高のフリだったはずだぜ！」

「お前のテンションには着いていけねえよ……昔から」

「幼馴染に言われると思わなかった台詞だよ。けっこうきたぜ？涙腺決壊まであと10秒？」

「疑問詞にしても俺にはわかんねえ。で、メロンパンを食ってほし
いと事だな？」

「概ねそんな感じかな？」

「食ってはやるけど、代わりには何もやれねえぞ？」

「それでも構わん。有難な」

「じゃ、行け」

「……？」

飽きられたか、愛想尽かされたか、嫌われたか。

こいつに嫌われたら俺の友達は水槽の中のグッピー5匹しか居なくなっちゃう。

最悪でもそれは防ぎたい。

「あー、腹減ったな……」

「それでも食つとけよ」

彼が指差した先には、ゴミ箱。

……これは手遅れだな。

「かえで鶏冠井……凄く頬痩けてるな……」

「ああ、一食でも抜くところなっちゃうんだ……。小さい頃、聡久に『何それキモッ！』と罵られていたさ」

二章　く翌朝にかけて

放課後。

俺が目を覚ましたのは、保健室だった。

……まだ鳩尾みぞおちが痛い……。

腹殴ると胃の機能が低下するんだぞ。

しかしここはワザと大袈裟に演技するか……。

「痛い……こりゃ重傷だな……」

……

馬鹿な……

誰もいない……だと!?

てつきり結衣がそばで「大丈夫!? 鶏冠井!」みたいな心情で待ってくれていると思ったのに!

これじゃ、骨折り損のくたびれ儲けじゃねえか!

いや、骨は折ってないぜ? 鳩尾だぜ?

……帰るor go to 職員室?

帰ろつと

「お兄ちゃん、ご飯出来たつて」

「ん、今日はいいや。腹減ってねえし」

結衣のせいで消化できてねえからな。

「……今日は未来も手伝ったんだよ?」

「それがどうした?」

「だから食えつつてんだよ! ほら! 口開けな!」

「ちょ、お前それどっからだして……オウツ!」

「オラオラオラオラアアア!」

「うおおおお！」

うわっ！腹模様が…

「てめえ…下剤入れやがったな…」

「ケツ！莫迦兄貴が」

「ふざ…けんなよ……。一日に二度倒れてたまるかあ！」

「バカな！兄貴が立った！」

「おら！お前も食え！」

「み、未来の分は下に用意してあるから！じゃあね！」

畜生…

トイレ行きてえ…

――翌朝――

「眠れねえ…」

昨夜から今朝にかけて腹が「ギュルルルルル…」と悲鳴を上げていたから、目が覚めてしまった。

これも全部、あの憎き妹のせいだ。

呪ってやる…

そうだ。

折角早く起きたんだから、早く着替えて出よう。

…あれ？

このネクタイ…つかしいな、通らねえぞ？

最近不調だな…

………
うつぜえ！もういい！ありのままの俺で行く！

「き、今日はキュートなアクセサリーだな鶏冠井」

「どこら辺？」

「そのネクタイとか目元のメイクとかさ…」

「目元描いてねえよ！しかもネクタイは違う！不運が重なっただけだ！」

「その団子、あたしは可愛いと思うけどな」

「気休めはよせよお…このやりとりも飽きたし…」

「じゃ、テスト勉強はしてきたか？」

「どうせならもつとイジれよおお！俺が不憫じゃねーか！」

「どっちなんだよ…お前のツンデレは理解りにくい」

「今すぐ明鏡国語辞典でツンデレを索引なさい」

「……載ってねえぞ？」

「何で持ってたんだよ…しかも普通は新明解か広辞苑だろ…」

「知らねえよ」

「ダメだ…突っ込む気力が湧かない…」

お腹痛い…

三章 早朝／放課後

「つか、何でお前はこんな朝早くから来てんだよ」

「ん？朝練。陸上の」

「お前、陸上してたんだな」

「まあ、暇つぶしってのもあるけどな。いつも朝5：00には目、覚めちまう」

「おばあちゃんか！！でも、そんなに走るから胸が固くなって膨らまねえんだな」

「うっせえ！走るのと胸とは関連性がちつとも見つからねえよ！」

「（。。）プッ」

「何だその笑いは？」

「いや、必死だなと思って」

「後で絶対殺す……」

「予習でもしとくか：あ、早くしないと始まるぞ？」

「分かってるよ！じゃあな！」

ガシャン！

勢いよく扉が閉まった。

さて、本当に何をしようか。

。*。*。（、・。）*。*。*。

「何で俺が…お前の…手伝いをせにや…ならんのだ……」

「いーじゃんいーじゃん、そうカッコしないですよー」

「するわ！この比率を見ろよ！8：2だぞ！もうウンザリだよ！」

「（。。）！ー！」

「！？」

「親友にそんなこと言われるなんて…ショック極まりないわ…」

「だって、これ、お前に課せられた任務だろ!？」

「重すぎるんだもん…」

「腹立つ…この紙束の代わりにお前をシュレッダーにかけてやるのか? そうだ。それがいい。まだメロンパンの借りを返してないしなあ?」

「そ、その件に関しては50円返したじゃん! チャラにしてくれないの!？」

「どっちにしろ、今新たに貸し借りが作られたからな?」

「私、多分シュレッダーに頭入らないよ?」

「冗談通じねえのかよ…じゃ、この貸しはいつか返してもらうから」
「うっ…酷い…」

「一応最後まで手伝うけど」

「……お願いします」

ふっ…

女の子株が大幅下落しましたか。

。*。*。(、;) *。*。*。

キンコーンカーンコーン…

終業を告げるチャイムが学校中に鳴り響く。

肩の荷が降りたかのように、気が抜ける。

やっと今週が終わり、休日に入ります。

今週は疲れた。

「すみません」

……誰?

お宅、誰?

つか、クラスに居たっけこんな奴。

「失礼ですが、誰でしょうか?」

「あ、1年3組の鞍馬杏里くいまあんじといひます。あの、少しお時間よろしいでしょうか」

「いいけど……」

。*。*。（――；）*。*。*。

「何の話？」

連れてこられたのは、校舎裏。

西日が横顔に当たる。

シチュエーション的には、告白？

いやまて。こんな子会ったことないぞ？

もし告白されるのなら……断るか？

いやいやいや。

願ってもないチャンスだ。

ここは……

「あの、実は私……ずっと前から……」

よし来い！

「本当に頭から触覚が生えてるのか気になってたんです！」

「……どこの世界の常識？」

「前に未来ちゃんから教えてもらって、ずっと気になってたんです

！」

あいつ……

こんな純情無垢な子にまで吹き込んでやがったのか……

「他には何を吹き込まれたの？」

「ええつと……本当は緑色だとか、3m以内に近付くと子供が出来る

とか、変態が空気感染するとか、あとは……」

「全部忘れなさい！今すぐ！」

「ええ！？待ってください！前頭前野の部分から削除していきます

ので！」

「残念！前頭葉に記憶は存在しない！」

「ええ！本当ですか！」

「一喜一憂はいいから！……もういいよ……絶対俺の体力が最初に無

くなるから…」

「で、結局の所、触覚は生えてないんですね？」

「俺は君と同じだよ……」

「そうですか。でも、私と一緒にすることは、×××も生えてないんですね。一応『触覚』ってことで
こいつ…

全然、純情無垢なんかじゃねえ！

下手したら俺が負ける！

「じゃ、俺は帰るから」

「さよーならー」

……………

追い討ちをかけるとは…

神様もなかなかやるじゃねえか。

今夜は未来をボコるしかねえな…

四章 　　深夜

「昼間の…真相を聞いてみるか…」
コンコン…

……ありや？
無反応。

「おい、未来ー？居ないのか？」

……無反応。
「入るぞ？」
ガチャ。

……やはり不在。
んゝ、靴はあるし…
まあいいや。
テレビ見よ。

。 *。 *。
(、、;) *。 *。 *

ギイイイイイイ…。

ガチャ。

カチャカチャ。

……泥棒？

深夜を狙った空き巣か？
でも、何故に鍵を？
行ってみりゃ早いか。

「あのゝ、すみません。鍵はどこに……未来？」

「……」

「その旅行鞆は、何なんだい？」

「も、文字通り、旅行だけど？」

「声の上擦ってるぜ？吐いちまえよ」

「旅行だつてば」

「旅行帰りにそのメイクかあ…そのイヤリングじゃあ飛行機通らないよなあ」

「や、夜行バスだから！」

「つかさあ、突っ込もうと思ってたんだけど、出たの夕方じゃね？」

「……だつた？」

「だつた」

「だつたつた？」

「だつたつた」

「だつたつたつ……」

「せい！シツコイ！お前そんなキャラじゃねえだろ！どんだけ追い込まれてんだよ！」

「あううう…。分かりましたよ！白状しますよ！」

「長かつた…」

「モデルしてますよ！撮影帰りですよ！」

「その心は？」

「金だよ！世の中金が全てなんだよ！」

「ウチの妹があああ！健気なお前は何処行つた！いや、お前が健気だつたことなんて一度も無いんだなあ」

「でも、稼いだ金は全て貯金してあるから！」

「健気だつた！いや、健気なのか？」

「取り敢えず、ママ達には内緒の方向で…」

「いや、俺母さんの携帯番号知らんし」

「私もだけど？」

「……」

「バカ親共が……泣けてくるな……。そうか。ありがとうな、未来」

「そうだ…私は生活費を確保するためにモデルの仕事を…。…どんなモデルだよおお！つか、お前、只のヒモじゃねえか！」

「兄貴からお前にまで成り下がった俺の二人称！そして夫婦関係は育んでないから多分ヒモじゃない多分！いや、もしかしたらもしか！」

「はあ…はあ…。仕事で疲れてるんだから…はあ…大声出させないですよ…はあ…」

「…残念ながら俺もだ…。じゃ、ドロ〜ってことで…」
「やつと終わった…」

「…待て。」

何だこの勝負は。

「隙ありっ！」

「ふお！」

「チツ…外したか！」

「性質悪いんだよこの生娘^{たち}が！そしてヒールはやめろ！」

「黙らんかいムサ男！」

「黙らんわい！お前が話を展開させるから『会話が多い』とかクレームが来てるんだろ！」

「作者に言え！どうせ私達は作者の手の平で踊らされている操り人形に過ぎないんだからさ…」

「それは言わないっていう約束だろ…うう…二次元の宿命かなかな」
「うう…涙出てきた…」

「よし、いつまでも玄関に居ちゃいけねえから、中入れ」

「あ、お邪魔します」

「思ったんだけどさあ、お前、キャラがブレてるよな。最初の頃は『お兄ちゃん！起きて！遅刻しちゃうよ！』とか言ってたのにな」

「正確には『…ちゃん、お兄ちゃん！遅刻しちゃうよ！』だけどね」
「」

「記憶力の次元が違いすぎる…」

「ブリっ子キャラとか疲れちゃったし」

「やろうと思えばできるのか？」

「ん？まあ……」

「やってみてくれよ」

「いいけど……」

「じゃあ、ヨーイ、スタート！」

「……………」

「……………」

「いや、何か振ってくれないと」

「あ、そうか。じゃあ、明日の朝飯、何が食べたい？」

「えー？にいにの作ってくれたご飯だったら何でも美味しいから、何でもいいよお」

「……オエ……………おっと、いや、すまん。胃液が食道に逆流しかけただけだ。口からレインボーになることは無い」

「でしょ！？そうなるでしょ！？」

「未来、俺が悪かった。土下座する。だがしかしブリっ子は金輪際やめてくれ」

「それだけ平謝られると悲しいんだけど……」

「うん、お前はそのままが一番いいよ」

「ど、どうも……」

「よし、俺は寝る。じゃあな」

「あ、おやすみ」

。*。*。（30分後）*。*。*

「^{うな}魔されて眠れなかった……」

「何に？」

「ブリっ子状態のお前がメイド服着て迫ってくる夢」

「腹立つけど、リアルに大丈夫？」

「枕が汗と涙でビショビショさ」

「ポカリでも飲んだら？」

「いや、ポカリはやめておこう。必要以上に糖分を摂取することになるからな。ポカリならアクエリのビタミンガードの方がいい。しかし、糖分量にさほど変わりはないから自分で作った方がいいな。材料は水と砂糖、塩、ハチミツ、梅干し。一番シンプルで体にいいなるべく砂糖は少なめにな。まず、水を温めて砂糖と塩を加える。次に梅干しを細かくして入れる。最後にハチミツ。水の量はコップ一杯分くらい。次はもっと簡単な方法。先ほど伝えた方法では残念ながら不味い。だから別パターンをお教えしよう。温めた番茶を用意する。その中にすり下ろした生姜を少し加え、種を抜いて細かくした梅干しを入れる。混ぜる。飲む。正確なレシピが知りたい人はググれ！ここまで聞いて分かった人もいるだろうが、梅干しは必須だ。塩分やクエン酸、アミノ酸が手軽に手に入り、その他栄養分も豊富だからな。分かったかな？よし、それじゃ、Let's cooking！」

「長えよファツキン野郎！」

「俺は文字数稼ぐ為なら何でもするぜ？」

「黙れよおお！早く寝ろ！」

「お兄様を足蹴にするとはいい度胸じゃないか」

「えー？ミクがいつにいにをあげにしたっていつのお？ひどいよー、にいにのばか」

「ぐはッ！すまん！俺がわるかった！許せ！」

「分かったならいいんだよ」

「分かったついでにもう一つ。未来、西の空を見る。朝日が見えるぞ」

「残念。東だなー。ってマジですか！」

「マジですよ！世間は徹夜で兄弟喧嘩をするのかい！？」

「いや、多分しない…」

「ギネスに登録しようかな？」

「いや、多分しない…」

「おっばい」

「死ねよおおお！」

「ちよ、一次休戦！一回寝ようぜ！」

「確かに…それは正論…」

「じゃ、good night」

「むしろgood morning」

「good morningってお早うって意味だよな？」

「多分」

「寝ねえか」

「絶対」

「遅刻は嫌だもんな」

「絶対」

「今、4：56だけど、飯の準備始めるか」

。*。*。（、；）*。*。*

「時間があると凝っちまうな」

「これ、全部食べる気？」

「無論、無理」

「無論じゃねえじゃん」

「何これ。誕生日パーティーか何か？」

「いや、一般家庭の朝食」

「やっちまった…」

「余ったら捨てる？」

「それはダメだ。消費者庁に怒られる」

「消費者庁、そんなことしてねえから」

「国土交通相？」

「飽きたから、それ」

「ま、食っちまおうぜ」

「それにしても…皿がヤバいほど多いんですけど…」

「捌ききれねえな…」

「ちょっと、時計見て」

「……………急に現実味を帯びてきたな……」

「着替えないとマズい？」

「120%だな」

「「急げっ！」」

…

「こんの…バカ共が…」

「いや…あんたの『凝り性』という性格を正せば何とかなったはずだけど…」

「仕方ないだろ、時間に余裕があり過ぎたんだから」

「結果このザマですか」

「すいません。内の兄が…」

「黙れ。うん、黙れよ」

「…そうだ。お前、儲けた金は振り込んでるって言ったよな」
「うん」

「じゃあ、引き出したことは？」

「そういえば、無い」

「暗証番号は？」

「…知らない」

「…マジかよ」

「振り込んだお金は？」

「下手をすればバカ親共が勝手に使っている可能性も…」

「…警察呼ぶ？」

「止めとこうぜ。その代わり、未来。俺にいい方法がある。土曜日開いてるか？」

。*。*。(、;) *。*。*

「これのどこがいい方法なのよ！」

「あ、もう、バツカ！関係ないこと話しかけんな！番号忘れたじゃねえか！」

「し、知らないわよ！」

「やり直すの面倒くせー！もういいじゃん、迷宮入りで」

「私は別にいいけど」

「へ？いいの？」

「お金なら簡単に手に入るし。水着に着替えるだけで金が手に入るってどれだけよ」

「俺の苦勞を返せ……」

「あんたが勝手に始めたんじゃない。知らないわよ」

「はあ？そりゃねえって……」

『銀行強盗だ！誰か捕まえてくれ！』

「……行くべきかな？これは」

「うん。逝ってらっしゃい。健闘を祈るわ」

「誰だよお前！ちよつ、敬礼やめれ！」

『あああ……お金が……お金があ……』

「早く逝け！」

「チークシヨオオオ！俺はいつまで妹の尻にしかれてりゃいいんだよおお！」

「邪魔だボウズ！どけ！」

「アアン」

「全く役に立ってないじゃない！もう！」

「へへ……お嬢ちゃん、やるデユオオオオオオオ！？」

「……未来よ、一応聞ぐが、それはナンですか？」

「護身用のスタンガン。初めて役に立つたわ」

「お前誰だよ……てか、違法じゃないの？」

「高校二年生が知らないなら私がしるわけないじゃない」

「よし。帰るか……」

「この屍はどう処分するのよ」

「銀行員にまかすとけばいいんじゃない？」

「責任感が微塵も感じられない…やったの私だけど」
「じゃ、レッツゴーホーム！」

。*。*。（、。）*。*。*

「暑い…エアコン壊れたか？」

「……もう喋りたくない…」

「電気会社に入れてみるか」

「そうして…」

「ケータイお前の後ろあるから取って。卓袱台が邪魔で取れない…」

「ふぬおおおお…」

「手、大丈夫か？ピクピクいつてるけど」

「もう無理…多分吊る…」

「じゃあ動けよ」

「暑いからイヤだ」

「我俣わがままガールめ…略して我禍わがまがールめ…」

「禍まがってどういう意味だコラ」

「いいからケータイ取ってくれよ…動いてんじゃん」

「面倒…アイス取ってくる…」

「付き合つとれんわ。とう！」

「ちよつと、邪魔しないでよ！」

「フフフ…台所に行くのは俺を倒してからにするんだな！」

「死ねオラ！」

「ぬぐふう！…股間を蹴り上げるのは止めろ…お腹に響くんぞ…」

「甘いんだよお前は…出直してきな」

「それは…反則だ…」

「あー、涼しい」

「この野郎…屍と化した俺の前で堂々とアイスを食べやがって…泣くぞー！」

「あ、電気会社に電話した？」

「返事が無い。只の屍のようだ」

「んー……」

「ちょ、口からバニラ零れてるって、垂れてる！俺の目に入る！望んでないのに白い涙が！分かった！電話するから！本当に屍死累々になる前に！」

「何人死ぬのよ……」

「よっこらせ……」

『プルルル…プルルル…ガチャ』

「あ、もしもし。エアコンの修理を依頼したいんですけど…あ、そうですか、はい。いや、バスケがしたいです」

『ガチャ』

「どうだった？」

「予約がいつぱいで3日後じゃないと無理だそうだ」

「はううう…暑さで溶けちゃう…」

「脳？」

「黙れバカ虫」

「虫だって苦労してるんだぞ！食物連鎖で上位にいる人間には分からないんだよ！最高位は多分姑しゅうめ。嫁を食い散らかす的な？」

「姑より鯪しゅうの方が強いと思うけど？」

「湊みなみずは脳液はなみず」

「何だその奇妙な歌は…」

「それにしても暑いな…やっぱ冷夏がいい」

「でも稲が育たないからね。冷夏は」

「！」

「え？何？」

「お前の口から他者を心配する言葉が出るとは…。只の高飛車ナルシストかと思っていた…」

「巫山戯ふざけるなよ？」

「そろそろ夕方が…」

「無視かよ…」

「買い物行ってくるけど、欲しい物あるか？」

「この世界の主導権」

「ごめんよ…。お兄ちゃんはそのを与えてあげることとは出来ない…」

「いや、冗談だから」

「じゃ、適当に買ってくるぞ」

「いつてらっしょい」

「行ってきます」

「……おい、早く出ろよ」

「やっぱり暑すぎて無理」

「それじゃあいつ行くんだよ」

「深夜にコンビニ」

「もういいよ…」

「しかし、この異常な暑さはいつまで続くんだろうな…」

・ 1 ・

「 $2 \times 2 \times 180 / 360$ は…何？」

「ちよつと…それ、中学2年でも答えられるんだけど…」

答えられれば苦勞なんてしないんだよ。

大体、分からないものは分からないし。数学は20点以上取ったことない。

「そんな問題も答えられないなんて…。どうしてそんなんで高校入れたの？」

「勘」だ。全問4択問題だったからな。オール満点だった」

そのせいで何故か首席で入学してしまった。

そして入学後はこのザマ…。俺の運はここぞという正念場でしか発揮されないらしい。

通常のテストでは15点がいいところなのだが、全国统一模試等では必ずBest 5以内にはランクインする。

「運がバカみたいに強い…まあ実際バカだけど。その運を何かに使えないの？」

「1度だけ麻雀をしたんだが、1時間で40万儲かった。あの時はビックリした」

「それ、どうやったの？」

「1時間で半荘^{はんちゃん}70回したんだが、毎回親スタートで配牌^{ハイバイテンパイ}聴牌^{テンホー}での第一ツモで自摸^{ツモ}和了^{あが}って天和^{テンホー}だった」

つまりは、1度も一向聴^{イーシャンテン}にならず、二順目の一本場で全員が跳^{はこ}んだわけだ。

「1時間に半荘^{はんちゃん}70回って…」
「俺もビックリしたさ。速攻^{そうこう}で役満^{やくまん}和了^{あが}るんだから。まあ、そのせいで友達が居なくなっただけど」

ちなみに、高校1年の時の旧友だ。
旧友とよんでいいのか分かんが。

「それで商売すりやいいじゃん」

「…その発想は無かった」

「いや、冗談^{じょうたん}だから。賭博^{とばく}は違法だから」

「そういや、昔から運だけはいいいんだよな。何でだろ」

「パパの運を引き継いだんじゃない？」

「未来！今ソイツの名を出すな！」

今ソイツの名を出せば、俺があのだ男の血を引いていることになるんだから！

「それは仕方ない。少なからずアンタはパパの子だから。パパとママがやってアンタが生まれてきたのは事実。それを否定しちゃ、アンタと私は兄妹ではないことになるから。…あ！それでいいんだ！よし！今日からアンタと私は兄妹じゃない！ok？」

「No！そいつは駄目だ！そんなことになっちゃ、俺のライフラインが断たれるも同じだ！だって権力はお前の方が強いから！」

「どうにかしてコイツを追い出す方法は…」

マズい…。

この恐妹（造語）^{きょうだい}が何かしでかす前に対策を考えないと。せめて金があれば…。

「お金か…」

「いくらかならあげてもいいけど？」

「『返してよ！お兄ちゃんのバカっ！いぢわるうう…』とか言わないよな？」

「うん、それよりお前は私の事を普段そんな目で見ているのかこの蛆虫^{うじむし}ロリコン野郎」

「残念だな未来よ。お前にそのようなことは微塵^{みじん}も一期待していない」

「そうか。それは光栄だ」

許してもらえてなによりだ。

少しだけお巫山戯^{ふざけ}が過ぎた。

てか、兄妹内でこんな会話が繰り広げられてるって普通じゃないよな？

「よし。ではいくらだ？」

「30万前後でどうか」

「フツフツ…お主も悪よのう…」

「……そのテンション飽きたんだけど」

「そうか。わかった、止める。でもそんな大金どこにあるんだ？」

「私の机の百科事典の箱の中に150万円が」

エロ本かよ！と突っ込みたいが、殺されるので押し殺した。

でも、また何でそんなところに。

しかも肝心の百科事典はどこに行ったんだ。

「何か言った？」
「い、いや、何も」
「それじゃ、待ってて」
「おう」

・ 2 ・

「はい、30万円」
「どーも。この機会に銀行口座の開設しとくか？」
「うーん、そうしようか」
「じゃ、行ってくるわ」
「手ぶらで大丈夫なの？」
「手ブラ！？お前、何て事言ってんだ！」
「五月蠅い黙れセクハラ腐れド変態」

あ、その包丁は何処から取り出した！？
お前のポケットは四次元か！
このままじゃ俺が裸過ぎる…
何か…あ！靴籠！
これなら包丁より断然リーチが長い！

「冗談だつて！ちよつと！…お前がその気ならこつちも靴籠で応戦だ！」
「とつ！」
「包丁は投げるものじゃない！それじゃ、行ってきますー！」
「あ、そうだ。ちよつとまって」

何？
殺すのだけは勘弁してよ。

傷害事件には関わりたくないから。

「多分だけど、ネットでやった方が得だと思う。ポイントが付いたりするし」

「便利なご時世になったもんだ。じゃあそっちでやるよ」

ウィーン…ガガガ…

「そういえば、最近パソコン使ってないな…。ネット料金とかは知らない間に発生してんのかな」

「知らない。あ、パスワードpass入力画面でたわよ。早く打ってよ」

…しば暫しの沈黙。

— Now なう loading . . . (*X—X)

「何で知らねーんだよおおお！」 (。皿。)

「こっちの台詞じゃああああ！」 (。。(

……ハッ！

いかんいかん。取り乱してしまった。

それもこれもあのクソ親父のせいなんだが。

「今日は、あきらめよう？」

「うん、そうだね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7761m/>

未定ー。

2010年11月11日12時01分発行